

史記 第五

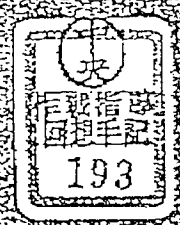
今村均大將回想録

五十年の十七、十八、十九、二十、二十一卷九

昭和三十三年十一月二十日

防衛研究所戦史室

防衛研究所図書館



はずんでいる。酔いにつれ、だんだん声を高くし、遠慮なしに語りあいはじめた。
最も強く私を肯かせたのは、この人々が、腹にはとかくに、功名手馴れなしをやりあつたものなのに、今は少しも之を口にせず、助け合つた隣接他部隊の勇戦によりしのぎ得たという、他隊よりの恩恵を感謝し合ひ、ことに台湾旅団の殊、後退河原隊の救援には、
(あんなにもうれしかつたことは、出征以来はじめてのことでした)
などと云い、又、

(飛行隊の協力がなかつたなら、此い通し得なかつたかも知れません。空が曇つてい
る日の兵の心の發りは「今日は飛んで来てくれないかな」の心細さによるものであ
りました。どんなに多くの敵にかこまれてもびくともしなかつた兵も、空の發りは
とても氣にしていました)

などと云い、一人の部隊長が、

(今度こそ勲給に示されている武勇と礼儀との御調中の粗糞と勇氣との区別をばつき
りとさとらされました。大層壯愾の傾きをもつている愛護隊の男は、とかくに自我
にこだわりの、さつぱり駄目でありましたのに、おとなしい男、言葉の静い持兵が、
よく責任を重んじ、実に勇直に戦い進みましたことは、意外のほどであります)

と云うと、同隊の婦人もが、

(その通り、その通り。僕の部隊もそうだった)

いずれも感慨深そうに言葉を述べた。

私はその翌年、東条陸相の要求により「戦陣訓」の起草にたずさわつたとき、その本訓
の「責任」の項中に、

(責任を重んずる者。是れ真に戦場に於ける最大の勇者なり)

を自ら記入した。南軍作戦後の各部隊長の言葉を、真理と感銘したからである。

慰安所

5.15年
昨年才前に新設された。第二十二軍司令部に補綴された久部中將は、二月中旬、その官
舎としてある家に、私と松田近衛旅団長を主賓とし、軍の幕僚各部長ら總數二十名ぐら
いを招き、夕食食をやつた。軍司令部に兼任の披露を兼ねたものである。

話の大部分、安藤軍のやつた大攻勢に関するものであり、その後は雑談に移つた。
しては、**軍の管理部長が**次のようなことを云いだした。

「**師団下**がかりますが、きよう日動車で十五名ほどの抱え主につれられ、百五十名程の
慰安婦が到着し、**軍管理部**で、**家庭の都合**はつけました。全部を南軍に留めてよいか、
近衛部隊は南軍から八軒も離れた部隊におりますので、そちらに何名移らせらよいか、
か、ご決定を願ひ、その方の設備は、松田旅団でやつていたただきたいと存じておりま

す」

すると誰かが、

「双方の兵員数に依り、按分できめたらいいでしょう」

そういうや否や佐田少将が、

「ご配慮は有難いですが、近衛の兵はいくらかばかとは違っており、その任りのご心配は無用にしていただきます」

と、いう。同少将は性的方面にも謙直の人である。

誰かが、

（近衛の兵は各地方で選ばれてる人たちですが、やはり本能上のごことは、考えてやつたほうがよいのではありませんか「でないと……」）

（私の方の宿营地には、無用にしていただきます）

はつきりこうことわつたので、他の話題に移つた。

慰安所というのは、科兵の性的慰安のためのところであり、わが国内では、戦地のこの種施設をひんしゆくする人が多い。が、これはわが軍だけのことでなく、列強軍ともに「特種看護婦隊」の名でやつて、いるとのこと。私もこの名の隊員がよいと思う。ずつと以前漢かから聞いたのだが、往昔、わが東北地方の前九年陸三年の戦のときも、朝廷は、京

女からなる慰安隊を、源氏の軍に送つてゐるとのことである。

右の日から十日程たち、慰兵隊が、各部隊の南寧慰安所利用状況を一表にして、参考のためといひ、各隊に配布して来た。それによると、予想に反し、之を利用する人は、近衛部隊の者が一番多く、しかも往復十五軒以上の道を歩んでのことである。

その後佐田少将に会つたとき、遺憾のない間柄のこととて、慰兵隊の調査表のことを話題にして見た。

「五十に手がとどきますと、こんなにも、二十代青年のごことがわからなくなるものですかね。私もあの表を見て驚いてしまひ、会食の席での言葉を卒直に取り直し、やつぱり部隊の宿营地に分派してもらふことにするつもりでおります」

「私も前には、あのほうのことは、君以上に馴染だつた。君の承知のよ大佐ね。あの人が中尉で陸大生中、あやまちをしでかし、学校は慰安慰分を参謀本部に申したてて来ました。次長以下は、校長の慰安を適当と認め、上院参謀総長の承認を求めたところ、一件書類を見た後、

（強姦でもなく、又金銭上の不都合もやつていない。相手の誘惑にまけてはいるが本能上の過失は、その他の人格が良い者であれば、寛容に見てやるべきだ。この報告のようなことは、上原にも覚えがないとはいえない。今度のところは退校にせず、本人の今後を見、要すれば将来慰安した方がよろしい）